資料３

前回の論点に対する事務局の考え

- 総合計画審議会からの答申方法
- まちづくりの理念・将来都市像
- 持続可能な地域社会（「地域自給圏」）

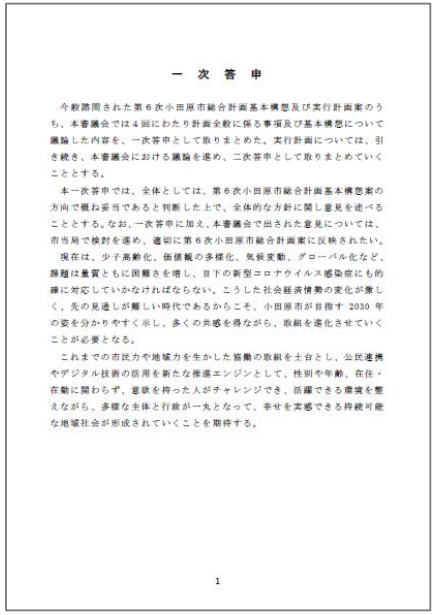
1　総合計画審議会からの答申方法

- 審議会での議論で、行政案の修正を求める意見が出る可能性もある。答申方法はどのような想定であるか。

【事務局の考え】

- 答申の方法については、行政案に対する意見を取りまとめた提言書のような様式を想定している。
- 答申方法について、改めて審議会の意向を確認したい。

答申様式
（令和３年度の答申）



一　次　答　申

今般諮問された第６次小田原市総合計画基本構想及び実行計画案のうち、本審議会では４回にわたり計画全般に係る事項及び基本構想について議論した内容を、一次答申として取りまとめた。実行計画については、引き続き、本審議会における議論を進め、二次答申として取りまとめていくこととする。

本一次答申では、全体としては、第６次小田原市総合計画基本構想案の方向で概ね妥当であると判断した上で、全体的な方針に関し意見を述べることとする。なお、一次答申に加え、本審議会で出された意見については、市当局で検討を進め、適切に第６次小田原市総合計画案に反映されたい。

現在は、少子高齢化、価値観の多様化、気候変動、グローバル化など、課題は量質ともに困難さを増し、目下の新型コロナウイルス感染症にも的確に対応していかなければならない。こうした社会経済情勢の変化が激しく、先の見通しが難しい時代であるからこそ、小田原市が目指す 2030 年の姿を分かりやすく示し、多くの共感を得ながら、取組を進化させていくことが必要となる。

これまでの市民力や地域力を生かした協働の取組を土台とし、公民連携やデジタル技術の活用を新たな推進エンジンとして、性別や年齢、在住・在勤に関わらず、意欲を持った人がチャレンジでき、活躍できる環境を整えながら、多様な主体と行政が一丸となって、幸せを実感できる持続可能な地域社会が形成されていくことを期待する。

1

答申内容（抄）　R3.10.7

全体としては、第６次小田原市総合計画基本構想案の方向で概ね妥当であると判断した上で、全体的な方針に関し意見を述べることとする。なお、一次答申に加え、本審議会で出された意見については、市当局で検討を進め、適切に第６次小田原市総合計画案に反映されたい。

～略～

第６次小田原市総合計画全般

- 第６次小田原市総合計画案では、小田原市が目指す2030年の姿と実現への道筋を掲げており、計画策定やその推進にあたっては、今後の小田原を担う子どもや若者の声を聴く取組をはじめ、小田原の未来を考える機会を積極的に設け、共に小田原市が目指す2030年の姿を実現していく機運を醸成していく必要がある。
- 市民の皆さんが、第６次小田原市総合計画の特色イメージがしやすい言葉を小田原の歴史から抽出することや、「世界が憧れるまち“小田原”」にどう向かっていくのかを明確にし、それらを広く発信していくことで、第６次小田原市総合計画の浸透が図られると考える。

etc

2　まちづくりの理念・将来都市像

- まちづくりの理念は何か、将来都市像は何かがはっきりしていない。
- 「地域自給圏」について、一体何をすることであるのか文章だけではわからない。
- 将来都市像「誰もが笑顔で暮らせる、愛すべきふるさと小田原」の書き込みが物足りない。

【事務局の考え】

- 審議会からの意見を基に、修正の方向性を以下のとおり検討し、「地域自給圏」の考え方を次ページのとおり改めて整理した。

現行（行政案）

3　まちづくりの理念と将来都市像

国全体での人口減少・少子高齢化が進み、合計特殊出生率は低位で推移しています。かつて多くの自治体が掲げた目標の柱に人口増加がありました。今後も出生増や社会増を目指すことに変わりはありませんが、人口減少や人口構造の変化が国全体で確実に進んでいくという現実を正面から受け止め、成長だけではなく持続可能な地域社会をつくるという目標を立てることが必要です。

豊富な地域資源や多彩な人材に恵まれた小田原は、厳しい社会環境の中にあっても、誰もが安心して笑顔で暮らすことのできる地域社会への道筋を示すことができる都市です。小田原が持つ「自然の力」、「人の力」、「まちの力」、「産業の力」、「文化の力」の５つの力を育てるとともに、これらを支える「行政の力」を高め、主権者であり、信頼の絆で結ばれた市民が主体的に課題解決の取組に参画できる仕組みや体制を構築することで、まち全体で様々な課題を解決していく力を高めます。そして、私たちの「いのち」を支えていくために必要な要素は、可能な限り地域の中で整え、分かち合える社会をつくっていきます。

この「地域自給圏」とも呼ぶべき地域社会の実現を目指し、ふるさと小田原を愛するすべての人が心を一つにし、喜びも苦しみも分かち合い、お互いに支え合い、より豊かなかたちで小田原を次の世代に手渡すための実践に取り掛かります。取組を進める中で、市民の暮らしが豊かなものになるとともに、まちの魅力が向上し、それによって市民のまちへの愛着が深まり、「地域自給圏」をつくる力が高まります。そのような小田原の姿が新たな資本や人材を引き寄せる求心力となります。

このような実践の積み重ねの先に実現を目指す将来都市像として、「誰もが笑顔で暮らせる、愛すべきふるさと小田原」を掲げます。

修正の方向性

3　まちづくりの理念と将来都市像

＜まちづくりの理念＞

国全体での人口減少・少子高齢化が進み、合計特殊出生率は低位で推移しています。かつて多くの自治体が掲げた目標の柱に人口増加がありました。今後も出生増や社会増を目指すことに変わりはありませんが、人口減少や人口構造の変化が国全体で確実に進んでいくという現実を正面から受け止め、成長だけではなく持続可能な地域社会をつくるという目標を立てることが必要です。そのコンセプトとして「地域自給圏」を掲げます。「地域自給圏」とは、地域資源を最大限に活用し、「いのち」を支えていくために必要な要素は、可能な限り地域の中で整え、分かち合うという、まちづくりの理念です。

豊富な地域資源や多彩な人材に恵まれた小田原は、厳しい社会環境の中にあっても、誰もが安心して笑顔で暮らすことのできる持続可能な地域社会への道筋を示すことができる都市です。「地域自給圏」というコンセプトのもと、小田原の地域資源を、「自然の力」、「人の力」、「まちの力」、「産業の力」、「文化の力」の５つの力とし、これらを支える「行政の力」とともに生かしながら高めていきます。また、主権者であり、信頼の絆で結ばれた市民が主体的に課題解決の取組に参画できる仕組みや体制を構築します。あわせて、より良い姿となるために必要なものは、近隣市町にとどまらず多様な主体と連携・協力しながら、相互に補い合い、分かち合っていきます。こうしたことで、課題解決の仕組みを整えて、まち全体で様々な課題を克服していきます。

こうした理念のもと、ふるさと小田原を愛するすべての人が心を一つにし、喜びも苦しみも分かち合い、お互いに支え合い、より豊かなかたちで小田原を次の世代に手渡すための実践に取り掛かります。取組を進める中で、市民の暮らしが豊かなものになるとともに、まちの魅力が向上し、それによって市民のまちへの愛着が深まります。そのような小田原の姿は新たな資本や人材を引き寄せる求心力となり、市内外の力が融合することで持続可能な小田原の実現に向けた循環がさらに活性化します。

＜将来都市像＞

小田原が実現を目指す将来都市像として、「誰もが笑顔で暮らせる、愛すべきふるさと小田原」を掲げます。それは、市民一人ひとりの「いのち」が大切にされ、まちに賑わいと活力をもたらしながら、安心して地域社会で暮らし続けることができる持続可能なまちです。

- 小見出しを設け、どの部分が何を説明するのかを明示
- 持続可能な地域社会をつくるためのコンセプトが「地域自給圏」であることを明示
- 小田原における「地域自給圏」の実践に基づきまちづくりを進めることを明示
- 地域内完結ではなく、外部の力も得て補完されながら進むことを表現
- 将来都市像を実現することで達成される状態を明示

3　持続可能な地域社会（「地域自給圏」）

- 「地域自給圏」について、一体何をすることであるのか文章だけではわからない。
- 地域外の方との交流や共生の視点がなく、自己完結型といった誤解を与えるのではないか。

【事務局の考え】

- 行政案で表現している「地域自給圏」の内容を、次のとおり改めて整理した。
- 修正内容やお示しした内容を基に、改めてご意見をいただきたい。

○「地域自給圏」とは、

⇒　持続可能な地域社会をつくるためのコンセプト

- **地域資源を最大限に活用し、「いのち」を支える要素を地域で整え、分かち合う**こと

○小田原における「地域自給圏」の実践とは、

① 「５つの力」＋「行政の力」を生かしながら高める
② 行政だけでなく、市民が課題解決の取組に参画できる仕組み・体制を構築する
③ より良い姿になるために必要なものは、多様な主体と連携・協力し、補い合い、分かち合う

⇒　こうしたことにより、**課題解決の仕組みを整えて、まち全体で様々な課題を克服する**

○「地域自給圏」で表す関係性や範囲とは、

- 一定エリアの資源を生かす概念であり、地理的概念にとどまらず、他者との関係性や交流範囲などすべてを捉えている
- 要素や分野によって自治会区域内や小田原市内だけで達成できるものもあれば、県西地域の近隣市町や神奈川県など多様な主体と連携しながら達成を目指すものもある。